

昭和新選碑文帖
大觀第二輯第叢書
安氏刻原拓書譜

下



0.1 2 3 4 5 6 7 8 9 11 12 3 4 5

始



16
安氏刻原拓書譜 下



新印
興味
碑
法
帖
大
觀

第二輯
第四卷



安氏刻原拓書譜下

信様、本年正月に先レ
此の書は、原石に依
る事、諸君が御用の方々
自己生一帆様には、秀國あ
る、一言、生之手、手写

遂妙造の力の先
之に之を以て
立、極めて其の事
が如くも、まづめぬ
事か而して、但其
事は、おこらしも一
事也。之を以て
見れば、是れは後漢書

乃は、既及中略云々後方
通じて、之際人名、即ち仲介
三十じ、而七十に以て
生れ、之に情、終極立之
き二枚、甚るに爲り、之を

立内後後之少中是之李
之空手為妙第孙曰重
自是其事乎平之波六系
う風見りを子孫已之そ
枝叶力標之未結

毛有正用、伴ニ乃神情
毛福、乃也支多御至二化
毛乃於毛に毛り於毛也
性城乃於房毛之毛り
物主在情屋も毛毛毛毛

之日也子之子也以私事
多以予予之私事也方、之私事
也之私事也消也為方桂桂
之也寫來也之也於也方也
也也也也也也也也也也

予家折桂枝格外醒家不
是家之有為特掛之不矣
以沒掛之所以家之有特
布幅未得其家之於深家
之些也賴之而實其甘之

後已せよ。其間乞之。被灾
家甚也。因詣其母子。探當
手。之日。杜門未久。又以。之。寫
之。草尤。是。性。是。之。是。是。
復。而。馬。也。病。在。府。亦。然。也。

物。及。至。重。大。劫。患。多。以。
迄。之。様。至。不。有。常。之。致。
仰。之。不。有。以。源。之。益。之。
方。多。渴。於。至。多。渴。於。至。
善。於。作。之。妙。於。志。之。惠。

而因清酒因至氣之生也名
譽之云此之以不手數君者
通者多似化之不妙似乃初方
音之宋音先于子子而通之不
之一枝枝條枝沫枝葉而有

強弱在葉鮮在子也曰而其
呼之三言而為通焉其差
少則其多枯枝也之言不當
設雖妍媚之采而特不充
乎美色雖不復有之矣

芳樹生乎方其發葉宣
以之增优宗源流之甫克
翠而矣任上也偏多
重者也於未將掌之以安
之文生焉於草之性也

沒之為濟濟實也夫以徑
德之過而仰仰之又極限當
然無事矣於拘束終乃亨也
於根在泥未吉彷於斯復
誰勇者也於孰也也於孰也

陽於滿溢至重之致於寬
能輕淡者淡於俗吏也其
得已之士偏鄙而希奇之物
率文以窮附文窮乎人文
化生之以沒者之為妙上元

之才使以重用山周為弱
於祕奧而波深之陰之清
及於也盡者必於傷通點
重之情也究妙於之眞鑑
精良蒙徇均均之繁於毛

村之三四用像承之極象
者之也如或然之云世方主事
至多能一之承方主事點高而
於互兼一點生之字之切一字
乃取篇之序而六祀如也

同不之省至卷以恒兵而
惟介涅如濃遂枯派即在於
方固近約魂之曲上心於已
晦莫行善若而立文於其身
神之情固於孤上其有以子

三桂林間閒于芳草就而
其生在鍾山而乃工寫而作
樹石理株穿苔龍隱諸如
鷺雲映映同烟月必刻鶴園
松意蕭蕭清月魚波兔孔

修竹彌幽也家之有歲
之宜乃以之於汎煥予
於此之われ後緣於此
寫得風流可喜之狀若
至者當因從心以成之

移居後
日或有閒
時乃復先
事耕種自
高而耕
以得未乃
復之於孫

之以古國
為家矣故
其種都、穀
少矣家畜亦
羊以豕羣
食之好肉而
以之供食也
是亦仰子之
以食也

因そて心に心に
身の處を失ひて、
云筆
音を眞空肩に立つて妙筆
迄之は應凡段にて於筆

男の心がいふも、うろた
ては老娘遇歎而幼兒三
子の頃もつ生枝立れ父の爲
にしとせば、すこして吉左
林といふ申すに於心

皮にしきれ馬りし怪事有
みの野葡萄シテ之時れ植
心ひき去秋者ふらは士中
を大笑之し、諺久之口、
ハあそぬ者可執兵か

文嘉幸
自憚齧己身にちよめア子姫
毛麿鶴子は日引私威モ道
レ底ニ手アハ株花見は或為興
おほえ云せ名於勿来ミ丈歎

依然仍取其名仍取其名
知者有之第第一也三用名曰大
度丈一家ほよそ車の如
様四海の主り才子と號名
被祕しゆり才子と號名

圓

毛村二年

毛村二年

圓



孫過庭書譜解説

孫過庭の書譜は古來王羲之の十七帖とともに草書の經典として、草書研究家の之に參せないものがない位有名なものである。元來書譜は書論であつて、現存するものは、その上巻である。他に之に從つて、中下とあつたかも知れないが、今では残つてゐない。書論として草書家の必讀を要する經典であるばかりでなく草書の妙なること亦、羲之の十七帖と共に、恰も儒學に於ける論語孟子の如く、書道入門の最高模範といつても過言ではない。

有名な帖であるだけ、古來より名彙帖中に集刻されてゐる。太清樓刻、秘閣續帖刻玉煙堂本、伴雲館本、三希堂本、等數へ來らば枚舉に遑のない位である。

これを大別して二種に區別することが出来る。その一つは孫退谷本或は天津本と稱せらるものである。又安氏刻とも安麓村本と稱へられてゐる。他の一つは元祐本、或は薛紹彭本と稱せらるゝものである。古くから天津本は精刻無比と稱せられ、薛紹彭本は筆致敦厚にして韻度高しと云はれてゐる。薛氏本は宋の元祐年間に刻したもので、日本では貫名菘翁から日下部鳴鶴翁に歸して今は三井家に秘藏されてゐるので、晚翠軒より印行されてゐる。鳴鶴先生はこれを激賞して、實によく研究されたものである。鳴鶴先生の草書の根底は全くこの薛氏本書譜にありと云つても過言ではない。

天津本は清朝の康熙四十七年に安麓村が歴代傳りたる真蹟を天津の真定梁蒼農相國杜平孫の家に見て、留ること十日釋文を作つて複本を世に出したと稱するものである。この真蹟が先年宣帝の寶庫から出で世に公にされた。これを從來の安氏刻本と比較すると流石精刻絕倫と稱せらるるだけあつて、實に真蹟と毫髮の差もなく、よくもこれ程に刻したものと感心させられる。

今この二者の真蹟に就いては、その何れがよいかは遠かに論斷することは出来ないが、書道研究家としては彼此対照その長を學ぶがそのるべき路であらうと思ふ。

安氏本にも序上の如く、真蹟本と刻本との二者がある。真蹟本が果して孫過庭の真蹟であるか否かについては尙研究の餘地が多分に残されてゐる。亦或は掲本であるかも知れない。但し安麓村本の原本であるだけは確かである。この真蹟本は支那からも日本では西東書房 不律法帖部よりも出版されてゐる。而し刻本にも又刻本としての面白味がある譯である。或大家より聞いた言であるが、「安麓村本は刻本で見た時は實に立派だと思つたが、その原本たる真蹟に接してそれはごく思はれぬ」と。實際こんな感じも、もたれるのである。刻本には實に險絶な趣が帖中にうかがひ得られるのである。私は書譜の研究としては矢張り刻本と真蹟本との二者を對象をすることが必要であると思ふ。殊に初學入門者には刻本よりする方が安易であるやうにも思はれる。

要するに書譜は草書研究の寶典である。草書家にこつては一度は必ず參せねばならない殿堂である。而してその目標は薛氏本、安氏刻本、真蹟の三者であることを忘れてはならない。

附記・孫過庭略傳

孫過庭は唐の垂拱の時中宗時代の人なり。字は虔禮、富陽の人、右衛胄曹參軍たり。博雅にして文章あり。草書は二王に憲章して用筆に工なり。儒拔剛斷異を尚び奇を好む。嘗て書論を著はして、その趣を妙盡す。即ち書譜これなり。宋の高廟情を藝文に墮る。嘗ていふ。此譜妙備はり草法手少しも置かず。その筆蹟の今に残るもの、書譜、千字文、獅子帖、景龍殿賦等あり。

孫過庭書譜釋文

夫自古之善書者。漢魏有鍾張之絕。晉末稱二王之妙。王羲之云。頃尋諸名書。鍾張信爲絕倫。其餘不足觀。可謂鍾張云。沒而義獻繼之。又云。吾書比之鍾張。鍾當抗行。或謂過之。張草猶當雁行。然張精熟。池水盡墨。假令寡人耽之。若此未必謝之。此乃推張過鍾之意也。

考其專擅雖未果於前規。摭以兼通故無慙於即事。評者云。彼之四賢。古今特絕。而今不逮古。古質而今妍。夫質以代興。妍因俗易。雖書契之作。適以記言。而淳漓一遷。質文三變。馳驚沿革。物理當然。貴能古而不乖。時今不同。弊所謂文質彬彬。然後君子。何必易雕宮於穴處。反王格於椎輪者乎。又云。子敬之不及逸少。猶逸少之不及鍾張。意者以爲評得其綱紀。而未詳其始卒也。且元常專工於隸書。百英尤精於草體。彼之二美。而逸少兼之。擬草則餘真。比真則長草。雖專工小劣。而博涉多優。總其終始。匪無乖互。謝安素善尺牘。而輕子敬之書。子敬嘗作佳書與之。謂必存錄。安輒題後答之。甚以爲恨。安嘗問敬。卿書何如右軍。答云。故當勝。安云。物論殊不爾。子敬又答。時人那得知。敬雖權以此辭折安所鑒。自稱勝父。不亦過乎。且立身揚名。事資尊顯。勝母之里。曾參不入。以子敬之豪翰。紹右軍之筆札。雖復粗傳楷則。實恐未克箕裘。況乃假託神仙。恥崇家範。以斯成學。孰愈面牆。

後羲之往都。臨行題壁。子敬密拭除之。輒書易其處。私爲不惡。羲之還見。乃歎曰。吾去時真大醉也。敬乃內懼。是知逸少之比鍾張。則專博斯別。子敬之不及逸少。無或疑焉。

余志學之年。畱心翰墨。昧鍾張之餘烈。抱義獻之前規。極慮專精。時逾二紀。有幸入木之術。無閒臨池之志。

觀夫懸鍼垂露之異。奔雷墜石之奇。鴻飛獸駭之資。鸞舞蛇驚之態。絕岸頽峰之勢。臨危據槁之形。或重若崩雲。或輕如蟬翼。導之則泉注。頓之則山安。纖纖乎似初月之出天崖。落落乎猶衆星之列河漢。同自然之妙有。非力運之能成。可謂智巧兼優。心手雙暢。翰不虛動。下必有由。一畫之間。變起伏於峯杪。一點之內。殊衄(衄ト同字)挫於豪芒。

況云積其點畫。乃成其字。曾不停窺尺檣。俯習寸陰。引班超以爲辭。援項籍而自滿。任筆爲體。聚墨成形。心昏擬效之方。手迷揮運之理。求其妍妙。不亦謬哉。

然君子立身務修其本。楊雄謂詩賦小道。壯夫不爲。況復溺思豪蕪。淪精翰墨者也。

夫潛神對奕。猶標坐隱之名。樂志垂綸。尚體行藏之趣。詎若功定禮樂。妙擬神仙。猶挺埴之罔窮。與工鍛而竝運。好異尚奇之士。覩體勢之多方。窮微測妙之夫。得推移之奧蹟。著述者假其糟粕。藻鑒者挹其菁華。固義理之會歸。信賢達之兼善者矣。存精寓賞。豈徒然與。

而東晉士人。互相陶淬。至於王謝之族。郗庾之倫。縱不盡其神奇。咸亦挹其風味。去之滋永。斯道愈微。方復聞疑稱。

蓋得末行末。古今阻絕。無所質問。設有所會。誠祕已深。遂令學者茫然莫知。領要徒見成功之美。不悟所致之由。

或乃就分布於累年。向規矩而猶遠。圖真不悟。習草將迷。假令薄解草書。粗傳隸法。則好溺偏固。自闊通規。詎知心手。

會歸若同源而異派。轉用之術。猶共樹而分條者乎。

加以趨便適時。行書爲安。題勒方扁。真乃居先。草不兼真。殆於專謹。真不通草。殊非輸札。

真以點畫爲形質。使轉爲情性。草以點畫爲情性。使轉爲形質。草乖使轉。不能成字。真虧點畫。猶可記文。迥互雖殊。大體相涉。

故亦傍通二篆。脩貫八分。包括篇章。涵泳飛白。若豪釐不察。則胡越殊風者焉。至如鍾繇隸奇。張芝草聖。此乃專精一體。以致絕倫。

伯英不真。而點畫狼藉。元常不草。而使轉縱橫。自茲已降。不能兼善者。有所不逮。非專精也。

雖篆隸草章。功用多變。濟成厥美。各有攸宜。篆尚婉而通。隸欲精而密。草貴流而暢。章務檢而便。然後凜之以風神。溫之以妍潤。鼓之以枯勁。和之以閑雅。故可達其情性。形其哀樂。驗燥濕之殊節。千古依然。體老壯之異時。百齡俄頃。嗟乎。不入其門。詎窺其奧者也。

又一時而書。有乖有合。合則流媚。乖則彫疏。略言其由。各有其五。神怡務閑。一合也。時和氣潤。三合也。紙墨相發。四合也。偶然欲書。五合也。心速體閑。一乖也。意違勢屈。二乖也。風燥日炎。三乖也。紙墨不稱。四乖也。情息手閑。五乖也。乖合之際。優劣互差。得時不如得器。得器不如得志。若五乖同萃。思遏手蒙。五合交臻。神融筆暢。暢無不適。蒙無所從。當仁者得意忘言。罕陳其要。企學者希風叙妙。雖述猶疎。徒立其工。未敷厥旨。不揆庸昧。輒效所明。庶欲弘既往之風規。導將來之器識。除繁去濁。觀跡明心者焉。

代有筆陣圖七行。中畫執筆三手。圖貌乖舛。點畫溷訛。頃見南北流傳。歎是右軍所製。雖則未詳真僞。尚可發啓童蒙。旣常俗所存。不藉編錄。

至於諸家勢評。多涉浮華。莫不外狀其形。內迷其理。今之所撰。亦無取焉。

若乃師宜官之高名。徒彰史牒。邯鄲淳之令範。空著縑相。暨乎崔杜以來。蕭羊已往。代祀麟達。名氏滋繁。或藉甚不渝。人亡業顯。或憑附增價。身謝道衰。加以糜蠹不傳。搜祕將盡。偶逢誠賞。時亦罕窺。優劣紛軒。殆難覘縷。其有顯聞

當代遺跡見存。無俟抑揚自標先後。

且六文之作肇自軒轅八體之興始於嬴正其來尚矣厥用斯宏但今古不同妍質懸隔既非所習又亦略諸。

復有龍蛇雲露之流龜鵠花英之類乍圖真於率爾或寫瑞於當年巧涉丹青工虧輸墨異夫楷式非所詳焉代傳羲之與子敬筆勢論十章文鄙理疏意乖言拙詳其旨趣殊非右軍且右軍位重才高調清詞雅聲塵未泯翰橫仍存觀夫致一書陳一事造次之際稽古斯在豈有貽謀令嗣道叶義方章則頓虧一至於此。

又云與張伯英同學斯乃更彰虛誕若指漢末伯英時代全不相接必有晉人同號史傳何其寂寥非訓非經宣從棄擇夫心之所達不易盡於名言言之所通尙難形於紙墨粗可彷彿其狀綱紀其詞冀酌希夷取會佳境闕而不逮請俟將來。

今撰執使轉用之由以祛未悟執謂深淺長短之類是也使謂縱橫牽掣之類是也轉謂鉤鑄盤糾之類是也用謂點畫向背之類是也方復會其數法歸於一途編列衆工錯綜郡妙舉前賢之未及啓後學之成規窺其根源析其枝派貴文約理瞻迹顯心通披卷可明下筆無滯詭詞異說非所詳焉

然今之所陳務裨學者但右軍之書代多稱習良可據爲宗匠取立指歸豈惟會古通今亦乃情深調合致使摹搨

試言其由略陳數意止如樂毅論黃庭經東方朔畫讚太師箴蘭亭集序告誓文斯竝代俗所傳眞行絕致者也寫樂毅論則情多佛鬱書畫讚則意涉瓊奇黃庭經則怡憮虛無太師箴又縱橫爭折暨乎蘭亭興集思逸神超私門誠贊情拘志慘所謂涉樂方笑言哀已歎

豈惟駐想流波將貽暉暖之奏馳神唯湧方思藻繪之文雖其目擊道存尙或心迷議外莫不強名爲體共習分區豈知情動形言取會風騷之意陽舒陰慘本乎天地之心既失其情理乖其實原夫所致安有體哉

夫運用之方雖由己出規模所設信屬目前差之一毫失之千里苟知其術適可兼通心不厭精手不忌熟若運用盡於精熟規矩諳於胸襟自然容與徘徊意先筆後瀟灑流落翰逸神飛亦猶弘羊之心預乎無際庖丁之目不見全牛

嘗有好事就吾求習吾乃粗舉綱要隨而授之無不心悟手從言忘意得縱未窮於衆術斷可極於所治矣

若思通楷則少不如老學成規矩老不如少思則老而逾妙學之少而可勉勉之不已抑有三時時然一變極其分矣至如初學分布但求平正既知平正務追險絕既能險絕復歸平正初謂未及中則過之後乃通會通會之際人書俱老仲尼云五十知命七十從心故以達夷險之情體權變之道亦猶謀而後動動不失宜時然後言言必中理矣是以右軍之書末年多妙當緣思慮通審志氣和平不激不厲而風規自遠子敬已下莫不鼓努爲力標置成體豈獨工用不侔亦乃神情懸隔者也

或有鄙其所作或乃矜其所運自矜者將窮性域絕於進誘之途自鄙者尙屈情涯必有可通之理嗟乎蓋有學而不能者未有不學而能者也考之即事斷可明焉

然消息多方性情不一乍剛柔以合體忽勞逸而分驅或恬澹雍容內涵筋骨或折挫槎枒外曜峯芒察之者尙精擬之者貴似況擬不能似察不能精分布猶疎形骸未檢躍泉之態未覩其妍穎井之談已聞其醜縱欲搪突義獻誣罔鍾張安能掩當年之目杜將來之口慕習之輩尤宜慎諸

至有未悟淹留。偏追勁疾。不能迅速。翻效遲重。夫勁速者超逸之機。遲留者賞會之致。將反其速行臻會美之方。專溺於遲。終爽絕倫之妙。能速不速。所謂淹留。因遲就遲。詎名賞會。非夫心閑手敏。難以兼通者焉。

假令衆妙攸歸。務存骨氣。骨既存矣。而遯潤加之。亦猶枝幹扶疎。凌霜雪而彌勁。花葉鮮茂。與雲日而相暉。如其骨力偏多。遁麗蓋少。則若枯槎架險。巨石當路。雖媚娟云闕。而體質存焉。若遁麗居優。骨氣將劣。譬夫芳林落葉。空照灼而無依。蘭沼漂萍。徒青翠而奚託。是知偏工易就。盡善難求。

雖學宗一家。而變成多體。莫不隨其性欲。便以爲姿。質直者。則徑挺不道。剛很者。又掘強無潤。矜歛者。弊於拘束。脫易者。失於規矩。溫柔者。傷於軟緩。躁勇者。過於剽迫。狐疑者。溺於滯澀。遲重者。終於蹇鈍。輕瑣者。染於俗吏。斯皆獨行之士。偏玩所乘。

易曰。觀乎天文。以察時變。觀乎人文。以化成天下。況書之爲妙。近取諸身。假令運用未周。尚虧工於祕奧。而波瀾之間已。淹發於靈臺。必能傍通點畫之情。博究始終之理。鎔鑄蟲篆。陶均草隸。體五材之效用。儀形不極。象八音之迭起。感會無方。

至若數畫竝施。其形各異。衆點齊列。爲體互乖。一點成一字之規。一字乃終篇之准。達而不犯。和而不同。留不常遲。遺不恒疾。帶燥方潤。將濃遂枯。泯規矩於方圓。遁鈎繩之曲直。乍顯乍晦。若行若藏。窮變態於毫端。合情調於紙上。無閒心手。忘懷楷則。自可貴義獻而無失違張而尚工。

譬夫絳樹青琴。殊姿共麗。隨珠和璧。異異質同妍。何必刻鶴圖龍。竟慚真體。得魚獲兔。猶慙筌蹄。

聞夫家有南威之容。乃可論於淑媛。有龍泉之利。然後議於斷割。語過其分。實累樞機。

吾嘗盡思作書。謂爲甚合。時稱識者。輒以引示。其中巧麗。曾不留目。或有誤失。翻被嗟賞。既味所見。尤喻所聞。或以年職自高。輕致凌誚。余乃假之以細繩。題之以古目。則賢者改容。愚夫繼聲。競賞毫末之奇。罕議峰端之失。猶惠公

之好僞。似棄公之懼真。是知伯子之息流波。蓋有由矣。

夫蔡邕不謬賞孫陽。不妄顧者。以其玄鑒精通。故不滯於耳目也。向使奇音在爨。庸聽驚其妙響。逸足伏櫪。凡識知其絕羣。則伯喈不足稱。良樂未可尚也。

至若老姥遇題扇。初怨而後請。門生獲書机。父削而子懊。知與不知也。夫士屈於不知己者。而申於知己。彼不知也。曷足怪乎。故莊子曰。朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。老子云。下士聞道。大咷之。不咷之。則不足以爲道也。豈可執冰而咎夏蟲哉。

自漢魏已來。論書者多矣。妍蚩雜糅。條目糾紛。或重述舊章。了不殊於既往。或苟興新說。竟無益於將來。徒使繁者彌繁。闕者仍闕。

今撰爲六篇。分成兩卷。第其功用。名曰書譜。庶使一家後進。奉以規模。四海知音。或存觀省。緘祕之旨。余無取焉。

垂拱三年寫記

有所權

昭和十一年六月二十日 印刷
昭和十一年六月二十五日 發行

新昭和
遺碑法帖大觀第二輯第四卷
安氏刻原拓書譜(下)

發行
人 田中和市 印刷所 玉石社 玉木印刷所
新昭和
遺碑法帖大觀第二輯第四卷
安氏刻原拓書譜(下)
發行所 寧樂書道會
印刷人 玉木源郎
新昭和
遺碑法帖大觀第二輯第四卷
安氏刻原拓書譜(下)
新昭和
遺碑法帖大觀第二輯第四卷
安氏刻原拓書譜(下)

300
44

終